

第四章 震災第四日 救援政策の始動―後藤新平と洪沢栄一の連携

震災第四日の朝、新任の内務大臣後藤新平から飛鳥山の洪沢邸へ使者が到着した。これに応じて栄一は三宅坂の官邸へ急ぎ赴き、震災への救済について大臣と協議する。以下は後藤から洪沢に届けられた九月四日付書簡と同日なされた後藤⇨洪沢会談の内務省記録である。

後藤新平から洪沢栄一への書簡

大正十二年九月四日

内務大臣 後藤新平

協定会副会長 洪沢栄一殿

謹啓、今回ノ震災ニ関シ御協議致シ度候条、本日午後一時内務大臣官舎へ御枉駕^{おうが}相煩度、此段得貴意候也

内務省覚書

大正十二年九月四日

今回ノ震災ニ関シ内務大臣ヨリ協調事項アル旨ノ別紙書面ニ依リ、本日午後一時内務大臣ト御会見、要領

如次

場所 内務大臣官邸

時間 午後一時

子爵御出席ノ理由 官民合同ニテ救済事項ヲ相談スルノ必要上、民間代表者トシテ協定会々々長タル子爵ト、同会理事添田敬一郎トヲ招カレタル由ナリ

新大臣後藤子爵ハ救恤ニ付テノ内務省発表ノ書類ヲ示サレタリ、其ノ内容ノ一二ヲ挙ゲレバ如次

- 一、救済方法ノ事
- 二、東京警備ノ事
- 三、保険金ノ事
- 四、支払金猶子ノ事 ①

新内閣の救済事業に着手した後藤は、財界の重鎮たる洪沢の支援を仰ぎ、この書簡と会談を契機とした両者は強く連携するに至る。『銀行通信録』に集録された彼の回想には、同日内務省でなされた会談の様子も語られる。

洪沢栄一「大震災の追想と所感一二」その五

続いて四日の朝早く内務大臣になられたと云うて後藤さんから至急に相談したい事があるから出て来いと、騎兵を使に寄越された、当時は此処でも家屋破壊の為め庭に小屋を建て、寝て居る時でしたが、何か重要な事だらうと思つて其日の午後一時に三宅坂の内務大臣の官舎まで行きました。其処で初て昨日新内閣が組織された事を聴きましたが、又臨時震災救護会事務局が成立して、其總裁は山本さん、副總裁は後藤さんそれぞれ役割が出来て、今や其人達が打揃つて色々仕事に取掛られて居る事も聴きました。早速後藤さんが、ヤア大変だ、余儀なく後を引受けた、昨日極つたんだが、実は今朝総理の所に閣議があつて色々相談して来た、それに付て貴方と相談して見たいと思つたから急に言うて上げた、早速来て下すつて宜かつた、どうか協調会に働いて貰ひたいと思ふが、どうだらうか、多分協調会の添田氏にも来て貰つて居る、果して協調会が斯う云ふ臨時の震災に應ずる場所であるかどうかは第二の問題として、極く人手も揃つて居るし、聞く所に依ると幸に焼けなかつたと云ふ、まことに好い塩梅だ。先づ臨時救済の事に付て、此事務局の援護者として相当の仕事をして貰ひたい、或はバラツクを造ると云ふか、病院を設けると云ふか、何れも必要の事である、予め之をして呉れとは言はぬが、先づ第一に徳川さんとも相談したが、細かい事はお前が知つて居ると思ふから、態態呼んだのだ。驚入つたことです、それに対して斯う云ふ事を前の内閣に申し上げましたと、後藤さんに前述べた米と、戒嚴令の話をした処が、果して君の建言であつたかどうか、そこまで詳しく知らぬけれども、それ等の事に付ては相當の注意を致してある、米は大抵六十万石許り此方へ這入つて来る事になつて居る、遅くも一週間の中には来る、既に昨日も大阪の方から飛行機で来た。是は確かであるから、食糧に付ての心配は先づない、其他にも実は今評議して来たが、こんな風にして来たと云うて、紙に書いた要件の廉々を示された、其中には此経済界の事をどうして宜いか、銀行に破綻でも起ると困る、火災保険の事が困難の問題と思ふ、どう云ふやうにして宜いか。どうぞ此場合経済界の大混乱を引きさぬやうにせねばならぬ、だから差向いては罹災者の援助、第二には経済界の安定、先づそれを主としてやらねばなるまいと思ふ。それ等の事は協調会ばかりでもいくまい、是は委員でも拵へて攻究させるが宜いだらうと思ふ、銀行者にも色々説があるさうだ。―後藤さんの右のお話は最も所謂肯綮に當つた事であつて、逸早くさう云ふ所へ気が著いて、種々の施設をされたことは、確に機敏の事と敬服して居ります。協調会の資格がどうであるかの詮議を先づせねばならぬやうに思ひましたけれども、そんな事を言つて協議して居ると、又説が出る、又寄らなければならぬ、終には薬の相談が調うたら病人が死んでしまつたと申すやうな事が出来ぬとも限りませぬからさう云ふ長たらしい事ではないまい、所謂拙速を責ぶ、責任は私を持ちます、間違つたら叱られる覚悟でやります。丁度添田君も見えましたので、それでは是から君と行つて、どんな事をして宜いか評議を極めます。どの位まで出来るか知らぬが、何でも宜しい協調会に相應しいか相應しくないか知らぬが、出来るだけは尽すと云ふ覚悟を以てやります。と云うて別れました。①

「九月四日」と白石喜太郎も記録した。「子爵ハ後藤内相ヨリノ書翰ニヨリ、同大臣ヲ官邸ニ訪問ス、渡辺得男隨行、災害ニ対スル応急策ニ関スル件、協調会ノ活動希望ノ件（金ヲ出スニアラズ、人ヲ働カセル方）」。

① 渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」。『銀行通信録』第七六卷第四五五号、三一―三三頁。（『渋沢栄一伝記

ついで渋沢は「協議会ヲ訪問シ内相ヨリ相談ノ件ニ関シ添田・田沢両氏ト懇談セラル、」また「第一銀行仮営業所ヲ訪問シ、佐々木頭取以下重役ニ面談セラル」①

二日新内閣の発足から四日渋沢との会見に至る後藤新平の動静を述べれば、親任式を終えて帰邸した当夜彼は、奥二階日本間に籠ってただちに救済と復興の施策を練った。その要点は前述の手稿「三百万市民ニ告ク 山本内閣入閣の事由と復興計画ニ対スル所信」に記録される。

後藤新平「山本内閣入閣の事由と復興計画」その二

予ハ火燭ニ包マルル帝都ノ惨状ヲ目撃シ、阿鼻叫喚ノ巷ニ臨ンテ其任務ノ至大至重ナルヲ自覚スルト同時ニ、之ガ善後ノ大計ヲ策定スヘク焦眉ノ急務ヲ痛感セリ。即チ政府ハ、

第一ニ救護、第二ニ復旧、第三ニ復興ノ方針ヲ執ルヘキコト論ヲマタス。九月四日復興ノ議ヲ立案シ、六日ノ閣議ハ実ニ之ガ根本方針ヲ決定スベク別案紙ヲ提案シタリ。帝都復興ノ第一方策トシテ帝都復興ハ国費ヲ以テシ、其財源ハ内外公債ニヨルベシ。第二方策トシテ此際一千一百万坪ノ焦土ヲ買収シ、速ニ復興計画ヲ決定シタル後改メテ之ヲ原所有者ニ払下ノ方法ヲ執ルコト。

此ノ第一議案ハ直ニ閣議一致ヲ以テ採用セラレ、直ニ救急事業ノ実施ヲ断行シ、之ニ伴フ諸般ノ法令ヲ立案決定スルコトナレリ。而シテ第二議案ニ対シテハ財政上ニ疑義アリトセラレ遂ニ閣議ノ一致ヲ経ル能ハ

① 『渋沢栄一伝記資料』第三一巻、五四〇頁。「白石喜太郎手記」(財団法人白石喜義氏所蔵)

ズ。尚ホ攻究ヲ要スルコトトシテ大蔵大臣ト稽查ノ末、予ハ別ニ採ルベキ方策ナキニシモアラズト信ジタルヲ以テ、先ツ前記第一議案ノ遂行ニ力ヲ致セリ。①

後藤新内相は九月三日には早朝から「自動車を駆って市内各区役所を歴訪」し、罹災の調査と救護の方策を「大努力」と「大馬力」をもって激励した。② 官邸における様子についてもつぎのような面影が想起される。「震災の直後」と東京市助役荒木孟は回想する。「初めて内務大臣としての後藤子爵に御目にかかったときの印象、之はたしか三日の朝でありました。市役所の報告に官庁へ参りました所が、偉い元気で激励して下さって、いや心配することはない。組織をしつかりやって行きさへすれば大丈夫だ、と言われた事を記憶して居ります。平生から調査とか組織とか云ふことをよく言われる方で、こんな説きでも矢張り後藤さんは後藤さんらしいことを言われると思いました。」③

震災第三日には「罹災者ノ境遇ニ対シテハ心深く之ヲ傷ム」摂政宮が、「官民其レ協力シテ適宜応急ノ処置ヲ為」せとの沙汰書を総理大臣に授け、内務金千万円を下賜した。これを受けて四日震災救済を旨とする新内閣の

① 後藤新平「三百万市民に告ク 山本内閣入閣の事由と復興計画ニ対スル所信」鶴見祐輔著『後藤新平伝 国民指導者時代後期上(帝都復興篇)』太平洋出版社、一九四七年。一四二―一四三、一四七頁。

② 山口好恵著『地震と内閣』前編、五三頁。

③ 『帝都復興秘録』一七八―一七九頁。

告諭第一号が発せられる。①

内閣告諭 第一号

東京及近県ニ互レル今次ノ震災ハ伴フニ大火災ヲ以テシ惨害ノ著シキ言語ニ絶シ日常ノ設備蕩然一空ニ帰シ焦眉ノ措置最モ急ヲ要ス

政府ハ先ツ秩序ヲ保チ安定ヲ得シムルニ勉メ食糧物資ノ補給建築材料ノ準備其ノ他応急百般ノ施設ヲ為スニ於テ最善ノ努力ヲ竭シツツアリ

摂政殿下ハ深く御憂慮アラセラレ親しく優渥ナル御沙汰ヲ賜ヒ内帑ノ資ヲ発セラルル旨ヲ伝ヘラレ適宜応急ノ処置ヲ為ス遺憾ナキヲ望マセラレ生民ノ休戚ニ就キ御軫念アラセラルルノ深キ同胞ト俱ニ本大臣ノ恐懼感激ニ勝ヘサル所ナリ・ニ盛旨ヲ奉シテ応急ノ処置ヲ執リ復旧ヲ図ルハ政府ノ全力ヲ拵ゲテ事ニ従フ所ナルモ亦挙国一致ノ奮起協力ニ待ツコト切ナリ

翼クハ罹災者ハ固ヨリ一般ノ国民皆能ク盛旨ノキヲ奉体シ官民戮力以テ仁慈ナル御沙汰ノ貫徹ヲ期シ各自相激励シテ適応ノ処置ヲ誤ラス此ノ異常ノ災害ニ対シテ絶大ノ努力ヲ致サレムコトヲ是レ本大臣ノ切望ニ堪ヘサル所ナリ

大正十二年九月四日

① 「宮廷録事」『官報号外』大正十二年九月四日。二頁。

内閣総理大臣 伯爵 山本権兵衛 ①

震災に先立つ一九二一年から二年余り後藤新平は東京市長の地位にあり、市長就任をめぐる経緯のなかで渋沢栄一との深い繋がりが結ばれていた。かねて伏魔殿と評される東京市庁は、一九二〇年いわゆる東京市政疑獄事件で揺れた。明治神宮参宮道の工事不正を発端とし、市全般の道路・下水工事に関する多数の汚職、さらにはガス料金値上げに係って、東京瓦斯会社から市会の二大党派に供された贈収賄がそれである。これによって東京市の参事会員、市会議員、市吏員等二十数名が検察局に召喚され、同年十一月には市長田尻稻次郎は辞職し、助役の三名と市会議長も任を辞する。ここに至り柳沢保恵伯爵など市会有力者は、「とくに手腕力量ある大人物を市長に据え、この乱麻の如き帝都の自治行政の更生を図ることを申し合せた。」② つとに一九〇三年東京市で水道建設に係わる贈収賄のため市長が退き、大隈内閣の司法大臣たりし尾崎行雄を後任に迎えて、腐敗を一掃した経歴がある。

市会に設けられた選考委員会において十二月七日緊張のうちに選挙がなされ、投票総数六五のうち六三の圧倒的多数で後藤新平が選出された。この選出は本人の諒承なしに勧められ、当選の通達に訪れた有力議員に彼は就

① 「内閣告諭第一号」『官報号外』大正十二年。一―二頁。

② 鶴見祐輔著『後藤新平伝（国民指導者時代前期上東京市長篇）』太平洋協会、一九四四年。二六八―

任を断乎固辞する。一九一六年から寺内内閣で内相と外相を歴任し、第一次世界大戦直後の欧米社会を視察した彼は、各国の産業を調査し、自国の殖産を促進すべく国立の「大調査機関（産業調査会）」、すなわちワシントンのナショナル・ビュロー・オブ・スタンダーズに類するいわば世界経済研究センターの創設を構想していた。

① すでに壮大な趣意書と計画書を起草し、首相原敬に法制化と予算措置を要望したところであり、その実現に専念する意志が、市長就任を固辞する第一の理由とされる。

候補者の後藤の辞意が固いのに接して、有力な委員のひとり坪谷善四郎は、静養中の渋沢栄一を大磯の別邸に訪ね、後藤の出馬懇請方を依頼した。かねて市政に非常な関心を有する渋沢は敢えて上京し、十二月十二日より三次にわたり芝の後藤邸を訪問する。この訪問に際して彼は『国民新聞』の記者につきのように語った。「私は一市民として、又一吏員として是非後藤男の出馬を、勧めるのではなく、懇請しなければならぬ。市長も政党政派から取らうと思えば、何人でも適任者もあろうが、政党的色彩のあるものではない。此の点から言っても後藤男は最も適任者である。（中略）九日の夜坪谷さんが見えられて、何の掛け引きもなく後藤男を全会一致で選挙したのだが、なかなか承諾してくれぬと云ってこぼして居た。」② その後もなお難航する市長就任交渉の行方については、そこにおける渋沢の役割をも含め、『日本経済新聞』の前身、『中外商業新報』の記事が詳細で

① 鶴見祐輔著『後藤新平伝（国民指導者時代前期上東京市長篇）』一五二頁以降。

② 『渋沢栄一伝記資料』別巻第二 日記（大正九年十二月）五〇八頁。

鶴見祐輔著『後藤新平伝（国民指導者時代前期上東京市長篇）』二六八―二六九頁。

ある。

東京市長就任への交渉（『中外商業新報』第一二四七七号大正九年一月一三日）

再度の交渉にも矢張り曖昧 昨朝藤男を訪へる渋子

懇談一時間余で物別れ 併しまだ脈はある？

十二日午前九時、王子から自動車を飛ばして渋沢男は麻布桜田に後藤男を訪ふた、用件は云ふまでもなく市長受諾の懇請の爲めであるが、子一語男一語、斯くて取交された一時間に至る会談の結果は、矢張り前日同様にてきつぱり断りながらしかも内実には脈があるという甚だ曖昧な処で物別れとなつた、さうして渋沢子は余り浮かぬ顔で中央亭に急ぎ、後藤男は工業倶楽部行の仕度をした

正式に渡りを付ける前の評定 中央亭に渋沢子等集る 一方藤男は区長に説明

脈があるかないで連日に亘る後藤男の市長問題は十二日も其日の天気似て晴るとも降るとも煮切らず、しかも是非今日は何とかせねばならぬとあつて、説得役の渋沢子を始め近藤廉平男・郷男・大倉男・中島男・安田善三郎・和田豊治・加藤正義・福原有信・矢野恒太・鎌田栄吉・有賀長文・大橋新太郎・藤山雷太諸氏、それに桐島市会議長と云ふ様な都市研究会中の有志有力者廿余名は、正午から丸の内中央亭に会合した、招待状は近藤男・加藤正義・藤山雷太氏及び渋沢子の四人の連名で発せられたといふ、斯くて渋沢子先づ其朝後藤男との会見の顛末を述べ、未だ交渉の余地があるから先づ其懇懇方法を講じた結果斡旋方は前記四人に一任することに決した模様である、そんな事は俺は知らぬと云ふ顔付きの後藤男は、午後一時から工業俱

楽部に市内各区長を招待し、前日の都市研究会で決議した処を尚よりよく諒解せしめる為め説明をやつて居た(午後二時)

首相内相に縋る事 後藤男を動かす最後の 手段として評定一決す

中央亭の会合は別項の如くであるが、一説に依ると桐島市会議長が渋沢子を始め商業会議所や工業倶楽部の主脳に泣きついて、渋沢子・近藤男・加藤前市会議長・藤山商業会議所会頭の四人の名義で招集した会合であるが、市議員の外は勿論有志として会したものであると云ふ、さて席上種々懇談の結果同じことを繰返すに過ぎず、且つ男の諾されぬ理由は産業調査会の問題に懸つてゐる為であるから、此問題につき原首相と諒解がつき又主務大臣たる床次内相からも慫慂して貰つたら如何な後藤男も動くに相違ないと云ふことに相談が纏まつて、両相の邸に電話で在否を伺ふと何れも東京に居ないと云ふ返事だつたから、そこで首相と内相への運動は一切渋沢子・近藤男・藤山・加藤氏の四人に一任することになつて午後三時に散会したのである

此上は首相のお力 大産調関係の諒解も出来て

之れなら後藤男も諾かれう 会を終へて渋沢子語る

老体を意とせず早朝から奔走した渋沢子は、会合の相談が纏まつてから曰く「私は午前男爵に会つてお勧めした時応諾にならぬ事に就て、一部一新聞に見るやうに市会を今日の儘にして置いては諾否共同問題にならぬと云ふ意見であるか、それとも市会が内諾を経ずして推挙し而も二・三議員が責任を以て其応諾を引受けたことを不快とせらるやに就いて男の存意を質した処、何れも辞退した理由でないのみならず、そんな事は格別問題でもなく矢張り産業調査会の為折角ながら引受け兼ねるとあつたから、此上は原首相にも会見して

更に原さんから幹旋の労を取つて貰つたら、産業調査会の方も何とか両者の諒解が出来て起つ事にならうかと考へたのである、一任された吾々は明日でも首相・内相等に会見する運びにしたいと思つてある」云々①

後藤は渋沢との会見についても多くは産業調査会の実現について語り、市長就任については依然黙したとされる。かくして渋沢をはじめ有力な交渉委員は首相原敬の加護を仰ぐことに決し、十三日の午前に内相床次の官邸を、ついで同日午後首相官邸を訪問した。さらに準備として某所において原敬と後藤新平の会談が秘かになされたあと、十四日に後藤は首相官邸を訪問し、原首相および床次内相と正式に会談する。渋沢らが市長就任の内諾を受けたのはその日の夕宵であつた。②

一九二〇年十二月二三日東京商業会議所の主催により同所楼上において東京新市長歓迎会が開かれ、大倉男爵、井上日銀総裁など百五十余名の出席者を前に、藤山会議所会頭の挨拶や後藤市長の答辞がなされ、渋沢の祝辞によつて会を綴じた。③ このときは渋沢が後藤に市政への大いなる尽力を懇請し、三年後には後藤が渋沢に震災への大いなる救援を念願するのである。

① 『中外商業新報』第一二四七七号、大正九年二月一三日。『渋沢栄一伝記資料』第四八卷、二八五頁。

② 鶴見祐輔著『後藤新平伝(国民指導者時代前期上東京市長篇)』二七一―二七九頁。

③ 『龍門雜誌』第三九二号、大正十年一月。『渋沢栄一伝記資料』第四八卷、二八八頁。

後藤市長歓迎午餐會 洪江演説

諸君、凡そ物事の嬉しいことは色々な場合にあるものでありますが、私自身は今日大変に嬉しく感ずる、先づ藤山君が私を此処へ据えて下さつたと云ふことを大層嬉しく思ひます、丁度此席が後藤男爵の御就任下さつたに就て會議所に於て其祝賀の宴を御張り下さつて、且それに就て殆ど東京市の所謂市を背負つて立たうといふやうな御方々多数の御集りと申して宜からうと思ふのであります、凡そ物事が思ふ様に届いたと云ふことは誰も嬉しいものである、其事柄が自己のことですら尚ほ嬉しうございますが、是が公共の事であつて而も吾々が常に愛する東京市のことであります、随分国の大事と云ふやうな事が思ふ様に行つて嬉しい場合がありますが、余り広い嬉しいことは適切に感ずることが薄いものです、然るに目の前に接して此儘抛つて置けぬと云ふやうな事柄が都合よく行つた時には其嬉しさは能く現はれて来ること、思ふ、私は非常に嬉しい、何だか皆さんも同じくニコニコした顔をして御座るやうで、同じやうに嬉しく感ずるものと想像するのであります。東京市の今日の有様に於て自覚が足らなかつたと今藤山商業會議所会頭の言はれた御言葉は、私も其自覚をして居らぬ一人であると思ふて自ら御譴責を受けたやうな気がします、併し其受けた譴責は私も他人に自覚が悪い、悪いと言たのでありますから、謂はゞ相子でどちらからも言はれる言葉であります、併し後藤市長さんは其事は早く御感じ下さつて、此事に就て斯くなればならぬと云ふことは、まだ市長の銓議のない前に既に其事を御発表になつたことを深く喜ぶのであります、殊に此東京市の今日の有様に於て是非適当な市長が欲しいと云ふことは誰しも感じて居る事であり、今御自身は事に依つたら己は脱線するかも知れないと言はれましたが其脱線するが如き人が今日丁度適当な市長であると私は思ふのであります、

私が此位置に立つて市長に御なり下さいと云つて奔走した為に或新聞は財閥の一人が云々、出ないでも宜い隠居が出しや張る、斯う云ふ小言を受けたのであります、私は決して財閥ではない、金持でもないことは皆さんも知つて居る通りであります、どう云ふ訳であるか、そんな苦情を今申した所がどうも仕方がございませぬが、実は私はさう云ふ意味でなくて全く自分も東京市民の一人であつて、どうか善い市長がないものと真に困つて、我身苦しさの余り多少たりとも此戦場のやうな状態を切抜ける途があるならばと云ふので微力を尽したのであります、此席には新聞記者も御出でになりますやうでありますけれども、財閥と云ふ冤罪だけは御免蒙りたいと思ひます、それだけ一言申上げて置きます、而して今日此重荷を新市長に御背負はせ申すことは余程吾々共憂慮に堪へませぬ次第であります、瘦馬に重荷を背負はせるのは実に気の毒である、併ながら健全な肥つた馬は重荷の方が宜い、重荷を背負はせると能く走る、重荷を背負はせるのが適當だらうと思ふのです、此点はどうも後藤君は何と仰しやるか知らぬが満場の諸君は私に御賛成下さると思ふのであります。(拍手喝采)①

初出 二〇二三年四月三日